

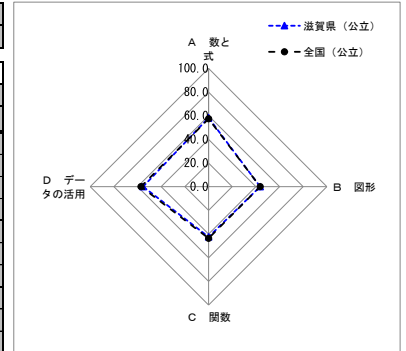
・以下の集計値／グラフは、4月19日に実施した調査の結果を集計した値である。

集計結果

対象学校数	滋賀県（公立）	全国（公立）	対象生徒数	滋賀県（公立）	全国（公立）
	99	9,339		11,756	891,913
分類	区分	対象問題数 （問）	平均正答率（％）		
			滋賀県（公立）	全国（公立）	
全体		14	51	51.4	
学習指導要領の領域	A 数と式	5	58.3	57.4	
	B 図形	3	43.6	43.6	
	C 関数	3	42.4	43.6	
	D データの活用	3	55.3	57.1	
評価の観点	知識・技能	9	60.2	59.9	
	思考・判断・表現	5	34.7	36.2	
	主体的に学習に取り組む態度	0			
問題形式	選択式	4	51.6	52.6	
	短答式	5	67.1	65.7	
	記述式	5	34.7	36.2	

※「学習指導要領の領域」と「評価の観点」については、一つの問題が複数の区分に該当する場合があるため、それぞれの分類について各区分の問題数を合計した数は、実際の問題数とは一致しない場合がある。

＜学習指導要領の領域の平均正答率の状況＞



問題別集計結果

問題番号	問題の概要	出題の趣旨	学習指導要領の領域				評価の観点			問題形式			正答率（%）		無解答率（%）	
			A 数と式	B 図形	C 関数	D データの活用	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度	選択式	短答式	記述式	滋賀県（公立）	全国（公立）	滋賀県（公立）	全国（公立）
1	42を素因数分解する	自然数を素数の積で表すことができる	1(1) ア・イ				○				○		61.7	52.2	10.0	11.5
2	連立二元一次方程式 $\begin{cases} 2x + y = 1 \\ y = x + 4 \end{cases}$ を解く	簡単な連立二元一次方程式を解くことができる	2(2) ア(ウ)				○				○		74.2	74.5	6.7	6.1
3	ある予想がいつでも成り立つかどうかを示すことについて、正しく述べたものを選ぶ	反例の意味を理解している		2(2) ア(イ)			○			○			45.7	44.9	0.5	0.4
4	変化の割合が2である一次関数の関係を表した表を選ぶ	一次関数の変化の割合の意味を理解している			2(1) ア(フ)		○			○			36.2	37.9	0.6	0.4
5	容器のふたを投げたときに下向きになる確率を選ぶ	多数の観察や多数回の試行によって得られる確率の意味を理解している				1(2) ア(フ)	○			○			81.3	83.3	0.4	0.3
6(1)	同じ偶数の和である $2n + 2n = 4n$ について、 n が9のときのような計算を表しているかを書く	問題場面における考察の対象を明確に捉えることができる	2(1) ア(イ)				○				○		73.6	73.8	6.7	6.0
6(2)	差が4である2つの偶数の和が、4の倍数になることの説明を完成する	目的に応じて式を変形したり、その意味を読み取ったりして、事柄が成り立つ理由を説明することができる	2(1) イ(イ)				○				○		46.6	48.7	22.7	20.0
6(3)	ある偶数との和が4の倍数になる数について、予想した事柄を表現する	結論が成り立つための前提を考え、新たな事柄を見だし、説明することができる	2(1) イ(イ)				○				○		35.5	37.6	29.0	26.2
7(1)	コマ回し大会で使用するコマをヒストグラムの特徴を基に選び、選んだ理由を説明する	データの傾向を的確に捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明することができる				1(1) イ(フ)	○				○		41.5	44.0	1.8	1.4
7(2)	箱ひげ図の箱が示す区間に含まれているデータの個数と散らばりの程度について、正しく述べたものを選ぶ	箱ひげ図から分布の特徴を読み取ることができる				2(1) ア(フ)	○			○			43.1	44.1	0.9	0.7
8(1)	与えられたグラフにおいて、点Eの座標を書く	与えられた表やグラフから、必要な情報を適切に読み取ることができる			1(1) ア(ウ) イ(イ)		○				○		53.7	54.6	7.4	7.2
8(2)	目標の300kgを達成するまでの日数を求める方法を説明する	事象を数学的に解釈し、問題解決の方法を数学的に説明することができる			1(1) イ(イ)		○				○		37.3	38.4	28.0	24.4
9(1)	証明で用いられている三角形の合同条件を書く	証明の根拠として用いられている三角形の合同条件を理解している		2(2) ア(フ)			○				○		72.6	73.2	8.4	7.5
9(2)	$\angle ABE$ と $\angle CBF$ の和が 30° になる理由を示し、 $\angle EBF$ の大きさがいつでも 60° になることの説明を完成する	筋道を立てて考え、事柄が成り立つ理由を説明することができる			2(2) イ(イ)		○				○		12.5	12.5	43.3	38.5

【中学校 数学】調査問題の結果から

■設問ごとの顕著な課題

- ・ [6](2) 「差が4である2つの偶数の和が、4の倍数になることの説明を完成する」問題の正答率は46.6%（全国比-2.1）である。「目的に応じて式を変形したり、その意味を読み取ったりして、事柄が成り立つ理由を説明すること」に課題が見られる。→取組①
- ・ [7](1) 「コマ回し大会で使用するコマをヒストグラムの特徴を基に選び、選んだ理由を説明する」問題の正答率は41.5%（全国比-2.5）である。「データの傾向を的確に捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明すること」に課題が見られる。→取組②

課題の改善に向けた取組①

[6](2)

「事柄が成り立つ理由を、構想を立て、根拠を明確にして説明する活動」を充実する。

○学習指導に当たって（取組の例）

1. 具体的な数を用いて、「差が4である2つの偶数の和は、4の倍数になる」ことを調べる場面を設定する。

ポイント

2. 成り立つことを説明するために、4の倍数は $4 \times (\text{整数})$ という形の式で表せばよいという見通しをもって、式を変形できるようにすることが大切である。
3. 証明を振り返り、統合的・発展的に考察する過程を遂行する。
「差が4である2つの偶数の和は、4の倍数になる」ことの証明を振り返り、どの部分を変えれば、「差が8である2つの偶数の和は、4の倍数になる」の説明になるといえるか考える場面を設定する。

課題の改善に向けた取組②

[7](1)

「データの分布の傾向を読み取り、判断の理由を数学的な表現を用いて説明する活動」を充実する。

○学習指導に当たって（取組の例）

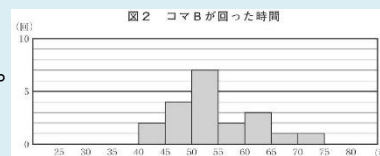
1. コマAとコマBのどちらのコマが長く回りそうかを話し合う場面を設定する。
2. 二つのヒストグラムの特徴を比較して、それぞれの分布の様子を読み取った上で、コマを選ぶ根拠を、最大値、最小値、範囲、累積度数などといった指標を用いて記述できるようにすることが大切である。

（コマAを選ぶ場合）

- ・ 「最大値が大きいから」といった生徒の表現を取り上げ、最大値はそれぞれのヒストグラムをどのようにみることによって分かるのかということについて確認する場面を設定する。
- ・ 最大値以外にも、「55秒以上の階級の度数の合計」など判断の根拠となることがあるかどうかについて取り上げ、吟味する。

（コマBを選ぶ場合）

- ・ 「安定しているから」という生徒の表現を取り上げ、そのことについてヒストグラムを基に話し合う場面を設定する。
- ・ 範囲が小さいことを捉え、安定していることを確認する。
- ・ 範囲の大小だけでなく、「コマBの方が範囲が小さく、最小値が大きいから、コマBを選ぶ。」など多面的に吟味し判断することも大切である。



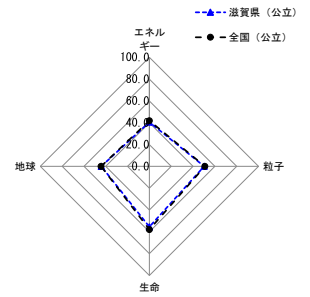
・以下の集計値／グラフは、4月19日に実施した調査の結果を集計した値である。

集計結果

対象学校数	滋賀県（公立）	全国（公立）	対象生徒数	滋賀県（公立）	全国（公立）
	99	9,337		11,759	892,585
分類	区分	対象問題数 （問）	平均正答率（％）		
			滋賀県（公立）	全国（公立）	
全体		21	48	49.3	
学習指導要領の領域	「エネルギー」を柱とする領域	6	40.6	41.9	
	「粒子」を柱とする領域	5	50.2	50.9	
	「生命」を柱とする領域	5	55.4	57.9	
	「地球」を柱とする領域	6	44.1	44.3	
評価の観点	知識・技能	7	45.5	46.1	
	思考・判断・表現	14	49.5	51.0	
	主体的に学習に取り組む態度	0			
問題形式	選択式	15	49.1	49.6	
	短答式	1	23.9	24.8	
	記述式	5	50.4	53.5	

※「学習指導要領の領域」と「評価の観点」については、一つの問題が複数の区分に該当する場合があるため、それぞれの分類について各区分の問題数を合計した数は、実際の問題数とは一致しない場合がある。

＜学習指導要領の領域の平均正答率の状況＞



問題別集計結果

問題番号	問題の概要	出題の趣旨	学習指導要領の領域				評価の観点			問題形式			正答率（％）		無解答率（％）	
			「エネルギー」を柱とする領域	「粒子」を柱とする領域	「生命」を柱とする領域	「地球」を柱とする領域	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度	選択式	短答式	記述式	滋賀県（公立）	全国（公立）	滋賀県（公立）	全国（公立）
1（1）	日常生活の中で、物体が静電気を帯びる現象を選択する	日常生活や社会の中で物体が静電気を帯びる現象を問うことで、静電気に関する知識及び技能を活用できるかどうかをみる	(3) (7)					○		○			43.3	44.2	0.1	0.1
1（2）	タッチパネルの反応に水が関係しているかを調べるために、変える条件と変えない条件を適切に設定した実験操作の組合せを選択する	モデルを使った実験において、変える条件と変えない条件を制御した実験を計画できるかどうかをみる	(3) (7)					○		○			75.6	78.5	0.2	0.1
2（1）	観測した気圧と天気図の気圧が異なる理由を空気の柱の長さで説明する際、適切な長さの変化を選択する	観測した気圧と天気図の気圧が異なる理由を考える学習場面において、観測地の標高を空間的に捉え、気圧の概念を空気の柱で説明できるかどうかを、気圧に関する知識及び技能を身に付けているかどうかをみる			(4) (7)		○			○			52.5	54.2	0.3	0.2
2（2）	気圧、気温、湿度の変化をグラフから読み取り、雲の種類の変化と関連付けて、適切な天気図を選択する	継続的に記録した空の様子を撮影した画像と百葉箱の観測データを天気図に関連付けて、天気の変化を分析して解釈できるかどうかをみる			(4) (4)		○			○			41.1	40.8	0.3	0.3
2（3）	上空の気象現象を地上の観測データを用いて推論した考察の妥当性について判断する	飛行機雲の残り方を科学的に探究する学習場面において、地上の観測データを用いて考察を行った他者の考えについて、多面的・総合的に検討して改善できるかどうかをみる			(4) (4)		○			○			29.8	28.5	0.4	0.3
3（1）	分子のモデルで表した図を基に、水素の燃焼を化学反応式で表す	化学変化に関する知識及び技能を活用して、水素の燃焼を分子のモデルで表した図を基に化学反応式で表すことができるかどうかをみる		(4) (4)			○			○			78.4	80.1	0.2	0.1
3（2）	水素を燃料として使うしくみの例の水の質量の変化について、適切なものを選択する	水を電気分解して発生させた水素を燃料として使うしくみを探究する学習場面において、粒子の保存性の視点から化学変化に関わる水の質量が変化しないことを、分析して解釈できるかどうかをみる		(4) (4)			○			○			61.2	60.2	0.3	0.3
3（3）	水素を燃料として使うしくみの例の全体を働かせるおおもを指摘する	化学変化に関する知識及び技能と「エネルギー」を柱とする領域の知識及び技能を関連付け、水素を燃料として使うしくみの例の全体を働かせるおおもとして必要なものを分析して解釈できるかどうかをみる	(3) (7)	(4) (4)			○			○			23.9	24.8	5.1	4.3
4（1）	ダイオウグソクムシとダンゴムシのあしの様子が異なることについて、生活場所や移動の仕方と関連付け、その理由を説明する	節足動物の外部形態の観察結果と調べた内容を、生活場所や移動の仕方と関連付けて、体のつくりと働きを分析して解釈できるかどうかをみる		(1) (4)			○			○			72.3	74.5	6.6	5.5
4（2）	脊椎動物には骨格のつくり共通点があることから、カラスの関節Aに対応するヒトとカエルのあしの関節を選択する	複数の脊椎動物の外部形態の考察を行う場面において、あしの骨格について共通性と多様性の見方を働かせながら比較し、共通点と相違点を分析して解釈できるかどうかをみる		(1) (4)			○			○			64.7	65.6	0.4	0.2
5（1）	おもりに働く重力とつり合う力の矢印を選択し、その力について説明する	力の働きに関する知識及び技能を活用して、物体に働く重力とつり合う力を矢印で表し、その力を説明できるかどうかをみる	(1) (4)				○			○			15.1	15.3	0.3	0.2
5（2）	「ばねが伸びる長さは、加える力の大きさに比例するか」という課題に正対した考察を行うために、適切に処理されたグラフを選択する	課題に正対した考察を行うためのグラフを作成する技能が身に付いているかどうかをみる	(1) (4)				○			○			45.7	45.0	0.5	0.4
5（3）	考察の妥当性を高めるために、測定範囲と刻み幅をどのように調整して測定点を増やすかを説明する	考察の妥当性を高めるために、測定値の増やし方について、測定する範囲と刻み幅の視点から実験の計画を検討して改善できるかどうかをみる	(1) (4)				○			○			39.8	43.3	33.5	29.4
6（1）	玄武岩の露頭で化石の観察が可能か判断し、その理由を選択する	玄武岩の露頭で化石が観察できるかを問うことで、岩石に関する知識及び技能を活用できるかどうかをみる			(2) (7)		○			○			47.8	48.0	0.3	0.3
6（2）	陸上のB地点で中生代のサンゴの化石が観察されることについて、垂直方向の変動だけで推論した他者の考察を検討し、水平方向の変動も踏まえた推論が必要であることを指摘する	過去の大地の変動について、垂直方向の移動だけで推論した他者の考察を、水平方向の移動も踏まえて、検討して改善できるかどうかをみる			(2) (4)		○			○			60.2	60.3	0.6	0.6
6（3）	東西方向と南北方向の地層の断面である露頭のスケッチから、地層が傾いている向きを選択する	地層の傾きの方向について、時間的・空間的な見方を働かせながら、ルートマップと露頭のスケッチを関連付け、地層の傾きを分析して解釈できるかどうかをみる			(2) (4)		○			○			33.3	34.2	0.9	0.7
7（1）	液体が気体に変化することによって温度が下がる身近な現象を選択する	液体が気体に変化することによって温度が下がる身近な現象を問うことで、状態変化に関する知識及び技能を活用できるかどうかをみる	(2) (7)				○			○			35.8	35.9	0.5	0.4
7（2）	吸湿発熱繊維に水蒸気を多く含む空気を通した一つの実験だけで行った考察について、課題に正対しているかどうかを検討し、必要な実験を指摘する	実験の結果が考察の根拠として十分かどうかを検討し、必要な実験を指摘して、実験の計画を改善できるかどうかをみる	(2) (7)				○			○			51.7	53.4	1.2	1.0
8（1）	アリの行列による情報を基に行列をつくるかを調べた実験の結果を基に、課題に正対した考察を記述する	アリの行列のつくり方を探究する場面において、視覚による情報を基に行列をつくるかを調べた実験の結果を分析して解釈し、課題に正対した考察を行うことができるかどうかをみる		(3) (7)			○			○			53.0	55.2	12.9	11.6
8（2）	予想や仮説と異なる実験の結果が出る場合、その意味することや考えられる可能性について考え、実験の操作や条件制御の不備の可能性を指摘する	予想や仮説と異なる結果が出る場合について、結果の意味を考え、観察、実験の操作や条件の制御などの探究の方法について検討し、探究の過程の見直しをもつことができるかどうかをみる		(3) (7)			○			○			52.7	55.1	17.4	14.9
8（3）	生物Xが昆虫かどうかとアリと比較しながら、観点と基準を明確にして判断する	未知の節足動物とアリの外部形態を比較して共通点と相違点を捉え、分類の観点や基準を基に分析して解釈できるかどうかをみる	(1) (4)				○			○			34.3	39.2	1.6	1.4

【中学校 理科】調査問題の結果から

■設問ごとの顕著な課題

- ・[8] (3) 「生物Xが昆虫類かどうかアリと比較しながら、観点と基準を明確にして判断する」問題の正答率は34.3% (全国比-4.9) である。「動物の外部形態について共通点と相違点を捉え、分類の観点や基準を基に分析して解釈すること」に課題が見られる。→**取組①**
- ・[5] (3) 「考察の妥当性を高めるために、測定範囲と刻み幅をどのように調整して測定値を増やすかを説明する」問題の正答率は39.8% (全国比-3.5) である。「測定値の増やし方について、測定範囲と刻み幅の両方に着目し、具体的に数値を示して計画すること」に課題が見られる。→**取組②**

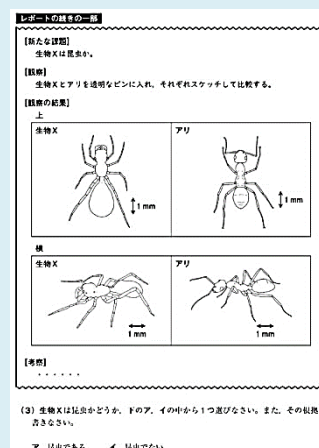
課題の改善に向けた取組①

[8] (3)

身近な動物の外部形態の観察を行い、共通点や相違点を見だし、それらを基にして動物を分類できるように指導する。

○学習指導に当たって（取組の例）

- ・動物を分類する際、主として共通点と相違点の視点で捉え、生徒自らが観点や基準を見いだして分類する学習場面を設定する。
- ・生徒自らがどのように判断したか、根拠を説明する際に、主語を明確にして表現するなどの学習活動を意図的に設ける。
- ・学習した内容や作成した動物の分類表等と照らし合わせ、生徒が新たに疑問や興味をもった動物について、どの仲間に分類できるかを説明する場面を設け、科学的に探究する学習活動を大切にする。



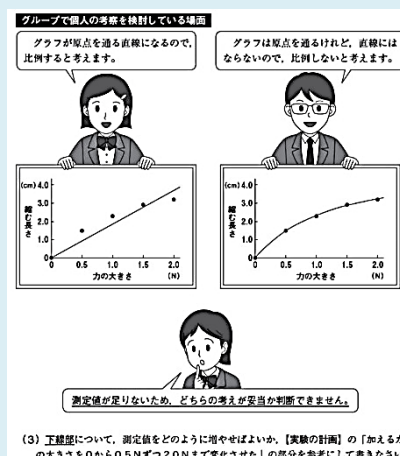
課題の改善に向けた取組②

[5] (3)

考察の妥当性を高めるために、追加の実験方法を検討して改善する機会を充実する。

○学習指導に当たって（取組の例）

- ・「根拠となるもの」と、課題を意識して「考えたことや判断したこと」を区別しながら記述する学習活動を行うなど、課題に正対する考察が行えるようになるまで、すべての領域で繰り返し指導する。
- ・具体的な数値を示した実験の計画や、検討・改善ができるように、生徒に実験結果の整理・分析のためのグラフ作成を促す場合には、生徒自らが実験の目的に応じて、測定する間隔と範囲の両方に着目し、グラフの軸や目盛等をかきこむ場面を設定する。
- ・課題に正対する妥当性の高い考察が行えているかどうか、課題に立ち返りながら実験結果の処理について振り返る機会を意図的に設けるようにする。また、改善点を明確にしたうえで、必要な実験の計画を検討するなどの学習場面を充実する。



S-P表の概要

S-P表の見方 (次ページ「学校／学級別解答状況整理表（S-P表）の見方」参照)

- ## 子どもたち一人ひとりの確かな学力を育むための具体的な活用方法

【分析の視点②】 セルの色に着目

誤答を分析し、課題を焦点化

県全体として、全国平均と差が大きい設問については、本冊子でも取り上げていますので、参考にしてください。調査問題の解説資料・報告書も確認します。

燈色セル【S曲線（青）より右側の誤答】

→当該児童生徒が理解していない可能性が高い設問
 =「**重点的に指導すべきと考えられる設問**」
 (一人ひとりの児童生徒に対し、見直し・復習などの指導を行うことが有効と考えられる設問)

長期的な視点で、授業と関連付けた取組を！

橙色セルが多い設問は、学校・学年・学級全体でもう一度指導する必要があると考えられます。
 「この設問を解くためには、どのような力が必要か」
 「その力を付けるためには、どのような指導が適切か」
 等を考え、「重点的に指導すべき点」を明らかにします。
 それを基に、全教職員が各自の授業実践で取り組むことを出し合いながら、協議をします。

黄色セル 【S曲線（青）より左側の誤答】

→当該児童生徒にとって比較的正答が容易だったと考えられる設問
(不注意による誤答や比較的克服が容易なものと想定される設問)

間違った設問にすぐに再チャレンジ！

誤答について、児童生徒が個々に見直し、もう一度同じ問題に取り組みます。調査問題の解説資料から過去の調査の関連する問題に取り組むことも有効です。すぐに取り組むことで、自分の誤答の原因を振り返ることができます。

全体的に黄色セルの多い設問は、誤答の原因を分析し、改善策を検討する必要があると考えられます。

[illegible]

1

左から右へ、全国正答率の高い順に問題番号を記載

[illegible]

※数字は解答類型 (“0”は無解答)

※色付きセルは誤値無効

※線が重なった場合は、以下の順で優先して表示される

縦線：青線、赤線、赤点線

橫線：赤線＜赤点線＜青線

青色

S 曲線：
児童生徒ごとに、左から数えて当該児童生徒の
正答数の数にあたる所を結んだ線

例) 該当児童生徒の正答数が「4問」なので、
左から4問目のところに縦線が引かれる

該当教科の全国正答率50%以上問題のうち、正答数が2分の1以下だった児童生徒の人数及びその割合(%)

S曲線 (青) より右側の
誤答 (燈色セル)

※小数点第1位を四捨五入して表示

高正答率分析対象	人数	割合
	23	18.5%

分析資料の活用方法（【学力層（四分位）分析グラフ】について）

「学力層（四分位）分析グラフ」の概要

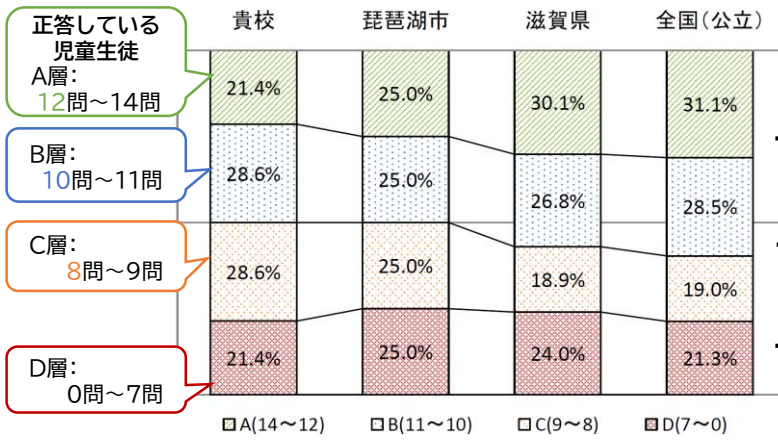
児童生徒を正答数の順に並べ替え、4等分したときの3つの区切りの値が四分位数です。提供された全国の四分位数を基に、児童生徒を4つの学力層（A層～D層）に分けたとき、各学力層の児童生徒数の割合を示したものが「学力層（四分位）分析グラフ」です。

これを活用することにより、集団の現状を客観的に捉え、習熟にあった授業のねらいが焦点化され、手立てを具体化することができます。また、D層（学力低位層）に手だてを講じるだけでよいのかどうか等、習熟度別少人数指導や各学力層の実態に応じた教材・教具の一層の充実を図ることが可能になります。

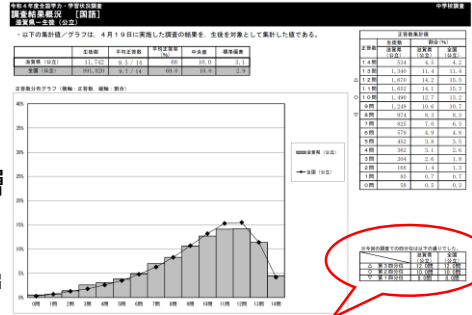
「学力層（四分位）分析グラフ」等の見方

例：中学校国語

各集団のグラフ
全国・県・市町・学校ごとの各層の児童生徒数の割合を示しています。



文部科学省からの提供資料
（例：中学校国語）



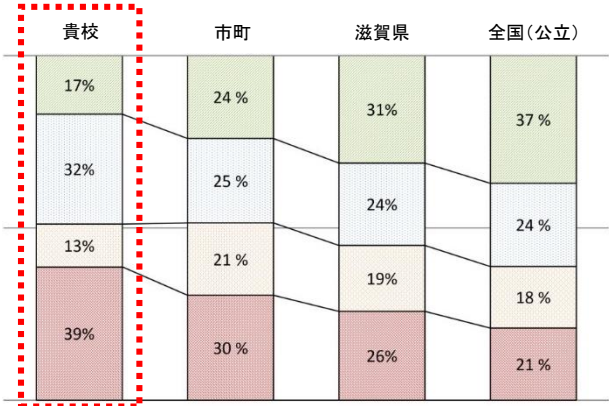
※今回の調査での四分位は以下の通りでした。

	滋賀県（公立）	全国（公立）
△ 第3四分位	12.0問	12.0問
◇ 第2四分位	10.0問	10.0問
▽ 第1四分位	8.0問	8.0問

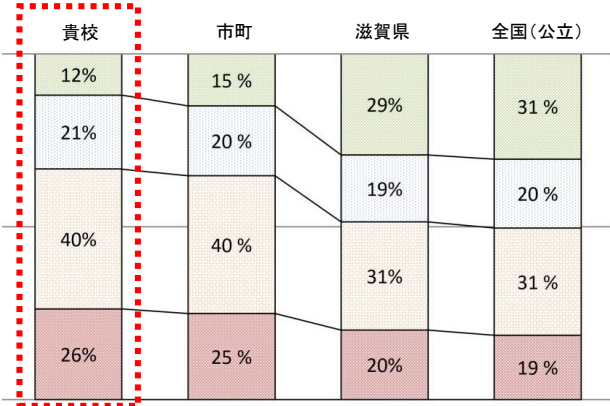
全国の四分位数に基づいて児童生徒を4つの層に分ける。

子どもたち一人ひとりの確かな学力を育むための具体的な活用方法

【例1】B層とD層の割合が大きい場合



【例2】C層の割合が大きい場合



習熟度別指導の工夫

算数・数学の学習で、習熟の程度の違いを踏まえた学習集団を編成し、D層の子どもがC層に、B層の子どもがA層にステップアップできるよう、学習集団に適した指導を行います。また、習熟の程度に合わせた家庭学習の工夫も併せて行います。

「まとめ・振り返り」や適用問題の徹底

C層の子どもに焦点を当てた指導を行うことで、C層の子どもがB層にステップアップできるよう支援します。例えば、毎時間の「まとめ・振り返り」を徹底したり、算数・数学の学習で適用問題を必ず行ったりすることで、学習内容の定着を図ることが考えられます。

分析資料の活用方法【学力層分析グラフの作成について①（市町教育委員会用）】

1. 使用するファイルを校種ごとに開きます。

- ・中学校の場合：【中学校用】R4 四分位グラフ作成ファイル【全国・県・市町・貴校との比較】
- ・小学校の場合：【小学校用】R4 四分位グラフ作成ファイル【全国・県・市町・貴校との比較】

2. 市町名を【校種名】入力用シートのK 1のセルに入力する。

（※入力できるセルは黄色にしています。）

	A	B	D	F	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z	AA	AB	
1						国語	貴校	琵琶湖市	滋賀県	全国(公立)	人数		数学	貴校	琵琶湖市	滋賀県	全国(公立)	人数		理科	貴校	琵琶湖市	滋賀県	全国(公立)	人数	
2	学校名	国語	数学	理科	A(14~12)	21.4%	25.0%	30.1%	31.1%	3		A(14~10)	21.4%	25.0%	30.5%	30.5%	3		A(21~13)	21.4%	25.0%	30.9%	32.2%	3		
B(11~10)					28.6%	25.0%	26.8%	28.5%	4		B(9~7)	28.6%	25.0%	26.5%	27.4%	4		B(12~10)	28.6%	25.0%	23.1%	24.5%	4			
C(9~8)					28.6%	25.0%	18.9%	19.0%	4		C(6~4)	28.6%	25.0%	23.6%	23.0%	4		C(9~7)	28.6%	25.0%	23.6%	23.3%	4			
D(7~0)					21.4%	25.0%	24.0%	21.3%	3		D(3~0)	21.4%	25.0%	19.4%	19.0%	3		D(6~0)	21.4%	25.0%	22.5%	19.9%	3			
6											合計人数	14						合計人数	14						合計人数	14
7	〇〇中学校	10	3	9																						
8		8	4	5																						
9		10	1	12																						
10		8	6	9																						
11		12	6	8																						
12		5	3	11																						
13		10	11	13																						
14		14	11	9																						
15		10	7	13																						
16		13	9	12																						

学校名を入力してください。

貴市町名および、貴市町教育委員会に提供された調査結果概況（〇〇市町一生徒（公立））＜正答数＞のデータをもとに値を手入力してください。（3教科それぞれ）

3. 文部科学省より、市町教育委員会に提供された令和4年度全国学力・学習状況調査 調査結果概況〔各教科〕 正答数集計値より、全国の四分位の正答数に基づいた四分位A B C Dの各層の割合を計算する。

（例）中学校 国語



正答数集計値				
正答数	数	割合(%)		
	貴教育委員会	貴教育委員会	滋賀県(公立)	全国(公立)
14問		3.3	4.5	4.2
13問	A	7.7	11.4	11.4
12問		14.0	14.2	15.5
11問	B		14.1	15.3
10問			12.7	13.2
9問	C		10.6	10.7
8問			8.3	8.3
7問	D		7.0	6.3
6問			4.9	4.8
5問			3.8	3.5
4問			3.1	2.6
3問			2.6	1.8
2問			1.4	1.3
1問			0.7	0.7
0問			0.5	0.3

※各層の割合を計算する

（例）中学校 国語

A層の割合の合計

$$3.3 + 7.7 + 14.0 = 25.0$$

この値を、それぞれ、
国語 K2~K5
算数・数学 R2~R5
理科 Y2~Y5
のセルに入力する。

※四分位A B C D各層のそれぞれの正答数の範囲は、全国の値と同じにする。

全国 四分位A B C D 正答数の範囲〔中学校〕

国語 A (14問~12問) B (11問~10問) C (9問~8問) D (7問~0問)

数学 A (14問~10問) B (9問~7問) C (6問~4問) D (3問~0問)

理科 A (21問~13問) B (12問~10問) C (9問~7問) D (6問~0問)

全国 四分位A B C D 正答数の範囲〔小学校〕

国語 A (14問～12問) B (11問～10問) C (9問～7問) D (6問～0問)

数学 A (16問～13問) B (12問～11問) C (10問～8問) D (7問～0問)

理科 A (17問～14問) B (13問～11問) C (10問～8問) D (7問～0問)

4. A B C D各層の割合を【中】入力用シートのセル（国語：K 2～K 5, 算数・数学：R 2～R 5, 理科：Y 2～Y 5）に3教科分をそれぞれ入力する。

	I	J	K	L	M	N
1	国語	貴校	琵琶湖市	滋賀県	全国(公立)	人数
2	A(14～12)		25.0%	30.1%	31.1%	3
3	B(11～10)		%	26.8%	28.5%	4
4	C(9～8)		%	18.9%	19.0%	4
5	D(7～0)		%	24.0%	21.3%	3

5. 【中】印刷用シートに、市町のデータがグラフに反映されているか確認する。



※文部科学省から提供された数値の関係上、各層の割合の合計が100%にならない場合があります。

6. 上記5までのデータを反映させた四分位グラフ作成ファイルを、各学校へ送付する。

分析資料の活用方法【学力層分析グラフの作成について②（学校用）】

1. 「入力用シート」のA 7のセルに、学校名を入力する。⇒ア
2. 文部科学省より提供された国語、算数・数学、理科の正答数のデータを「入力用シート」の緑色のセル（B 7以降、D 7以降、F 7以降）に受験者全員分入力する。⇒イ

小学校

「[13 桁の数字]_06 解答・回答状況（児童）[2 桁の数字].xlsx」（学校番号）（学級番号）

中学校

「[13 桁の数字]_06 解答・回答状況（生徒）[2 桁の数字].xlsx」（学校番号）（学級番号）

※文部科学省から提供された正答数のデータを収めたファイルは学級（組）ごとに分かれていますので、「入力用シート」には、全学級分を順につなげて入力してください。

学校名

国語 数学 理科

〇〇中学校

学校名を入力してください。

ア
学校名

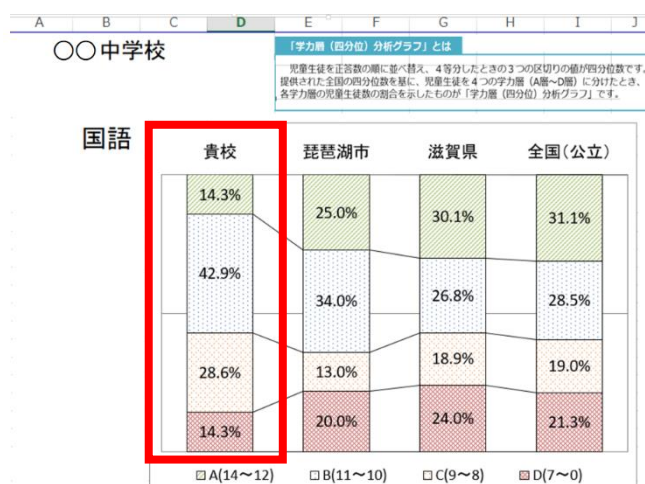
イ
正答数

1 ページ

文部科学省から提供された各教科の正答数のデータを値で入力（貼り付け）してください。

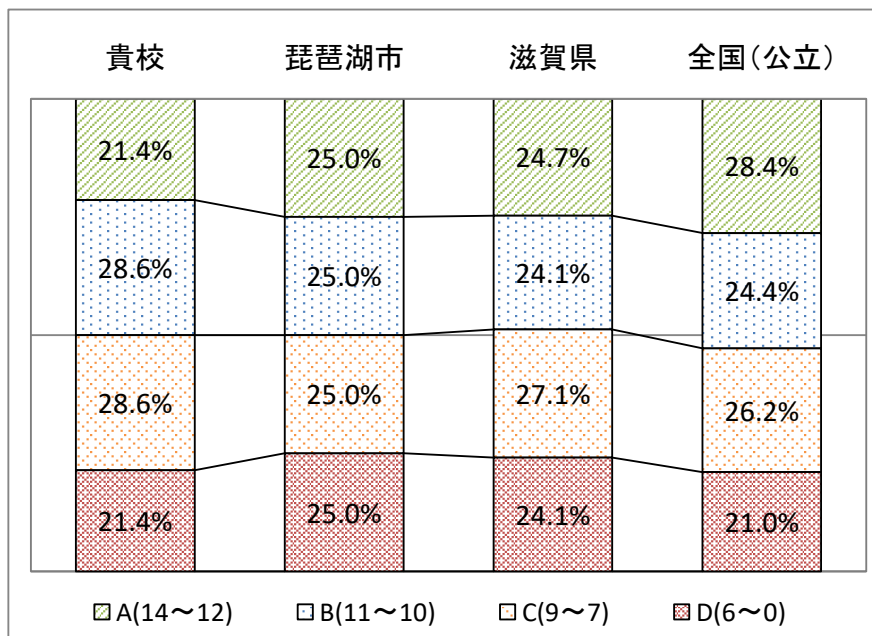
貴市町名および、貴市町教育委員会に提供された調査結果概況（〇〇市町—生徒（公立））＜正答数＞のデータをもとに値を手入力してください。（3教科それぞれ）

3. 「印刷用シート」のグラフに、学校のデータが反映されていることを確認する。

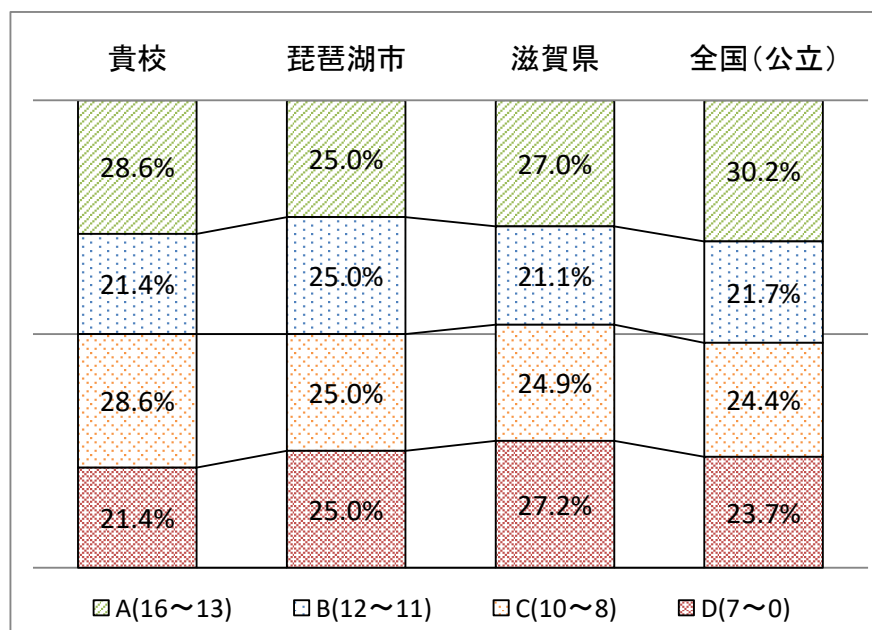


※文部科学省から提供された数値の関係上、各層の割合の合計が100%にならない場合があります。

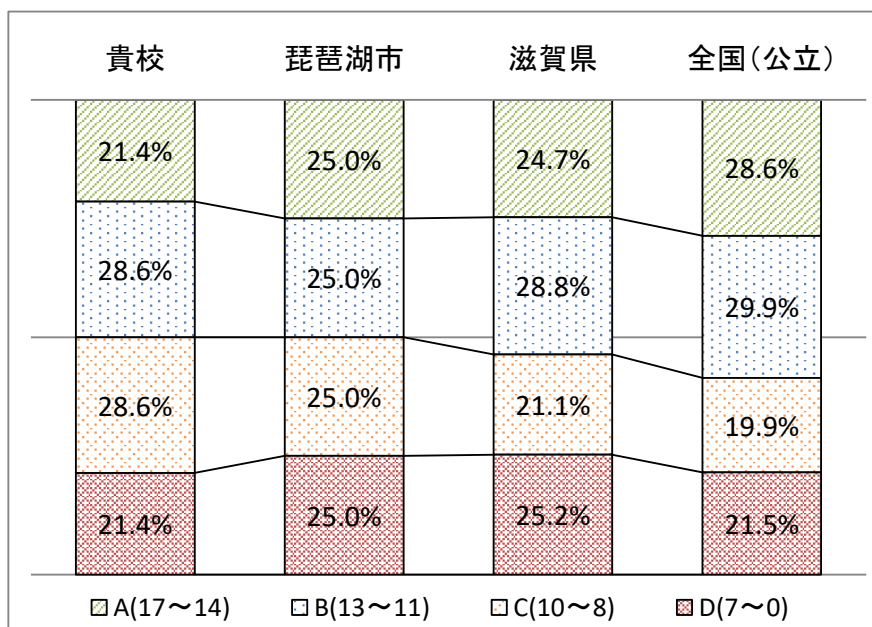
国語



算数

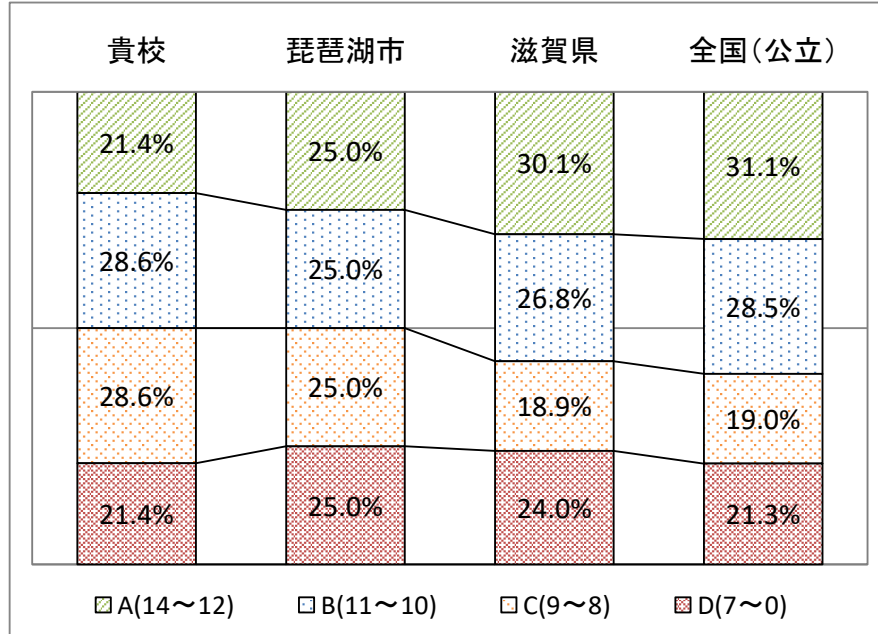


理科

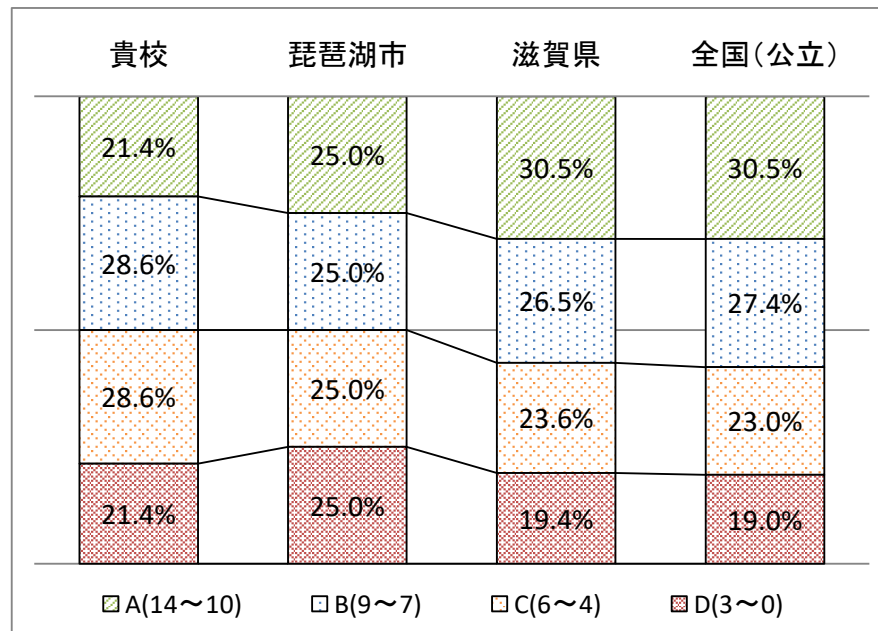


※文部科学省から提供された数値の関係上、各層の割合の合計が100%にならない場合があります。

国語



数学



理科

